

# 看護系学生の性役割志向性に関する実態調査 —同一都市地区の学生の比較—

門脇千恵, 佐々木和義

神戸市看護大学

## Study of Nursing Students's Sex-Role Orientation

Chie KADOWAKI, Kazuyoshi SASAKI

Kobe City College of Nursing

### Abstract

The purpose of this paper is to clarify the relationship between Contemporary the young and Sex-role. Refined 2 sex-role Scales, A Japanese version of the Inventory of Sex-Role Orientation (ISRO) and the Personal Attributes Questionnaire (PAQ), for use in Nursing school, Junior college and College of Nursing students. 348 nursing students (18-31 yers) were evaluated equality of the sexes. Particularly, College's nursing students more evaluated equality of the sexes than Nursing school's students. And College's Students more developed a tendency to do Androgyny and Masculine than other nursing students.

**Key words:** Sex-Role Orientation : ISRO (性役割志向性), The Personal Attributes Questionnaire : PAQ (性役割尺度), Nursing students (看護系学生)

### はじめに

近代における「男が仕事」「女は家庭」という近代家父長制に固有の性役割分担が成立<sup>1)</sup>して以後、男性優位の社会構造となってきた<sup>2)</sup>。

現代はその伝統的な固定観念的な性役割分担を支持するものと、男女平等観に基づく性役割分担に否定的なものに二分される<sup>3)</sup>。また東<sup>4)</sup>は、看護職の職位が上昇するにつれて、両性具有型と男性型の増加傾向が認められると述べている。つまり就職したての一般看護婦では、未分化型が多いが、学生指導、主任、婦長と職位が上がるにしたがって社会的望ましさが高くなっていることがわかった。そこで、われわれは、これまで女性の典型的な職業とされてきた看護系学生を対象に神戸市内の大学生、短大生、専門学校生に対して心理学で注目されている概念である両性具有 (androgyny)<sup>3, 4)</sup> についての実態調査を行った。両性具有は、従来の男女役割特性を両極に対立させるもので

はなく、別個の独立した次元のものであるとの前提で、両方の特性をあわせもち、状況に応じてそれらを駆使できる人間が男女を問わずもっとも適応的で理想的な人格の持ち主とする論である。ベムの両性具有尺度 (BSRI) は、その代表的なものである<sup>6, 7)</sup>。また日本語版心理的両性具有については、性役割尺度 (PAQ) などがある<sup>5, 8)</sup>。本調査では、現代の若者の性役割を日本語版性役割志向性尺度 (ISRO)<sup>9)</sup> と性役割尺度 (PAQ) を用いてその関連性を検討した。

今回の調査において、この2つの調査票を使用した理由としては、(1)調査項目が少なく、比較的簡単な質問紙であること、(2)信頼性・妥当性の検討がなされていることの2点である。

### 1) ISRO (Inventory of Sex-Role Orientation) 尺度

Dreyer, D.A.<sup>10)</sup>らは性役割志向性 (Sex-role orientation) という概念を構成し、それらを測定するための16項目からなる性役割志向性尺度 (ISRO) を作成した。Dreyerによると、伝統的な性役割志向をもつ

人、とりわけ女性は、その行動が古い世代から受けつがれた習慣や慣例によって規定されており、男女平等へと向かっている現代の風潮にも関わらず、その影響は少ない。それに対してフェミニストは、理論的な側面においても、また日常の実践活動の側面においても、社会の変革を求め、政治的、経済的な面での男女の平等を提唱する傾向があると述べている。

採点方法は、採点コードに従って得点を求める。得点可能な範囲は16点から80点であり、得点が高いほど性別役割分担を否定する傾向が強く、男女の平等観が強いことを意味している<sup>8)</sup>。

## 2) PAQ (The Personal Attributes Questionnaire) 尺度

スペンスら<sup>11)</sup>が1974年にSex Role Stereotype Questionnaire<sup>12)</sup>をもとに開発した性役割スケールである。この性役割スケールの項目は、“各々項目が男女を問わずどの程度望ましいか、又それがどちらの性にどの程度典型的であるか”を評定させるものである。両方の性にとって理想的であるが、より男性にとって典型的とされた特性をM尺度とし、より女性にとって典型的とされた特性をF尺度とした。さらにどちらか一方の性だけに望ましく、典型的とされた項目をMF尺度として設定した項目からなる。本調査は24項目からなる縮小版PAQを使用した<sup>9)</sup>。

PAQ尺度を下位尺度別に整理すると、男性性尺度(M尺度)、女性性尺度(F尺度)、社会的望ましさ(MF尺度)の3つの下位尺度から構成されている。回答者は各項目にある性役割特性がどの程度自己にあてはまるかを5段階評定で回答する<sup>8)</sup>。

採点基準については、PAQの採点コードに合わせて採点する。質問ごとに0～4点を配点した5点スケールになっており、各下位尺度の得点範囲は0～32点である。

## 調査方法

### 1) 対象

神戸市内の看護系女子学生として、看護専門学校学生47人、短期大学部学生145人、看護大学学生157人の348人。調査対象の選定条件として、(1)地域差を考慮しなくても良い同地域にある看護婦養成所であること、(2)これまで女性の典型的な職業とされてきた看護婦養成学校の学生であること、(3)教育形態がそれぞれ

違うこと、(4)看護学実習を経験する前の学生であることをあげた。以上の4点を満たす3校を選び調査を行った。

### 2) 手続き

平成10年2月から平成10年10月に調査を実施。各学校においては、講義終了後に、調査の目的の説明を行い、承諾の得られた対象者にのみ、ISROとPAQをセットにして配布し、一斉に実施、その場で回収した。説明に当たっては、ISROとPAQについての内容説明とともに、他施設の学生との比較を行うことも併せて了解を求め、結果は、すでにフィードバックした。

### 3) 分析方法

結果の集計と分析に関しては、統計パッケージSPSS<sup>13)</sup>を使用した。

(1)年齢に関しては、各群の平均および標準偏差を求め、全体の群間差を一元配置の分散分析で検討した。群間に有意差が認められた場合は、有意差のある群間を特定するために、さらにチューキー法<sup>14)</sup>により多重比較を行うこととした。

(2)ISROに関しては、教育形態別に各対象者の総得点の平均得点と標準偏差を算出し、次に群間の差をみた。採点は採点コードに従って各対象者の各下位尺度の得点を求めた。差の検定は、一元配置の分散分析を行い、群間に有意差が認められた場合は、チューキー法により多重比較を行うこととした。

(3)PAQに関しては、各群ごとに男性性尺度(M尺度)、女性性尺度(F尺度)および社会的望ましさ(MF尺度)の平均得点および標準偏差を求めた。そして一元配置の分散分析によって教育形態別の差をみた。次に全対象者個々について、心理的両性具有型、男性型、女性型、未分化型に分類し、各群ごとに、各性役割パーソナリティ類型の人数を数え、出現率を計算した。分類基準は、東<sup>1)</sup>が用いたパーセンタイル順位を基準とした分類基準を採用した。その後教育形態別に3×4のカイ二乗検定を行い差の検定をおこなった。

(4)ISROとPAQおよび教育形態との関連を検討するために教育形態別に心理的両性具有型、男性型、女性型、未分化型、それぞれのISROの平均得点と標準偏差を算出した。そして教育形態別の差をみるために性役割パーソナリティ(4水準)×教育形態(3水準)

の二元配置の分散分析を行った。また全学生を対象に、性役割パーソナリティ別にISRO平均得点の差をみた。差の検定は一元配置の分散分析を行うこととした。群間に有意差が認められた場合は、チューキー法により多重比較を行うこととした。

## 調査結果

### 1) 調査対象群の年齢比較

各教育形態別の平均年齢は、看護専門学校生24.34±6.17歳、短期大学部学生19.06±1.95歳、看護大学学生19.31±1.57歳であった。各学校群を一元配置の分散分析で差の検定を行った結果、1%水準で有意の差がみられた( $F[2,345]=69.733, p<.01$ )。さらにチューキー法による多重比較をしたところ看護専門学校生と短期大学部学生および看護大学学生との間に5%水準で有意の差がみられた。

### 2) ISROの総得点からみた教育形態別の比較

表1は、各教育形態別の平均得点と標準偏差を示したものである。各教育形態別の差を比較するために、一元配置の分散分析を行ったところ3群間に有意差があった( $F[2,346]=6.29, p<.01$ )。さらにそれぞれをチューキー法により多重比較をした結果、看護専門

学校生と短期大学部学生および看護大学の学生との間に5%水準で有意差があった。

### 3) PAQ得点からみた教育形態別の比較

(1) 男性性尺度(M尺度)、女性性尺度(F尺度)、社会的望ましさ(MF尺度)について、各教育形態別の平均値および標準偏差の結果を表1に示した。M尺度、F尺度、MF尺度の教育形態別の差をみるために一元配置の分散分析を行った。その結果、男性性尺度(M尺度)、女性性尺度(F尺度)、社会的望ましさ(MF尺度)それぞれに差はみられなかった。

(2) 性役割パーソナリティの分類にしたがって、心理的両性具有、男性型、女性型、未分化型に分け分類を行い、教育形態別に出現率を算出し表2に示した。また教育形態別の差をみるためにカイ二乗検定を行ったところ有意の差はみられなかった。しかし看護大学学生では、両性具有型21.0%、男性型27.4%、女性型28.7%、未分化型22.9%であり他の学生と比較すると両性具有型および男性型がより多く出現していた。

### 4) ISROと教育形態およびPAQとの関連

性役割パーソナリティ分類別(両性具有型、男性型、女性型、未分化型)によるISROの総得点の平均値および標準偏差は表3に示す通りである。教育形態と性

表1 教育形態別のISRO得点とPAQ各項目得点

項目	看護専門学校生		短期大学部学生		看護大学学生		
	平均得点	SD	平均得点	SD	平均得点	SD	
ISRO得点	56.85	7.80	60.17	6.92	60.90	6.57	**
PAQ-M	15.36	4.00	15.44	4.70	15.81	4.00	N.S
PAQ-F	20.80	3.08	20.54	3.84	19.99	3.77	N.S
PAQ-MF	12.23	3.76	11.28	3.65	12.03	3.48	N.S

\*\*一元配置の分散分析で $p<.01$

表2 教育形態別の性役割パーソナリティの人数と出現率

	看護専門学校生		短期大学部学生		看護大学学生	
	人数	%	人数	%	人数	%
両性具有型	9	19.1	30	20.7	33	21.0
男性型	11	23.4	29	20.0	43	27.4
女性型	15	31.9	49	33.8	45	28.7
未分化型	12	25.5	37	25.5	36	22.9
合計	47	100	145	100	157	100

表3 教育形態およびPAQのISRO尺度得点

項目	看護専門学校生		短期大学部学生		看護大学学生	
	平均得点	SD	平均得点	SD	平均得点	SD
両性具有型	60.44	8.91	60.13	7.70	61.09	6.96
男性型	59.45	5.80	60.72	7.37	63.16	5.68
女性型	54.73	6.65	59.80	6.30	58.64	6.43
未分化型	54.42	8.92	60.24	6.95	60.86	6.79

役割パーソナリティ分類別の差をみるために二元配置の分散分析を行ったところ、性役割パーソナリティ分類の主効果は5%水準で有意の差があった( $F[3,337]=3.77, p<.05$ )。また教育形態の主効果も1%水準で有意の差がみられた( $F[2,337]=5.13, p<.01$ )。しかし交互作用はみられなかった。次に全学生を対象にした性役割パーソナリティ分類別のISRO総合得点の平均得点の差をみた。差の検定は一元配置分散分析を行った。その結果5%の水準で有意の差がみられた( $F[3,345]=3.590, p<.05$ )。さらにチューキー法による多重比較をした結果、男性型と女性型の間に5%水準で有意の差がみられた。

## 考 察

### 1) 調査対象群の年齢比較

調査対象の年齢を比較したところ、看護専門学校生と他の学生との間に年齢差があった。このことから、今後の考察において年齢に関係するであろう事項については、配慮する必要がある。

### 2) ISROの総得点からみた教育形態別の比較

看護専門学校生と比較すると短期大学部学生および看護大学学生は、男女の平等観が強いことがわかった。このことから、看護系の短大生もしくは大学生は、「男は仕事、女は家事・育児」といった性役割分担には否定的な考え方を持った学生が多く、男女の平等観を強く持っていることがわかった。また東<sup>9)</sup>の報告と比較すると、神戸地区の看護系学生は、同じ関西エリア(同志社大学、京都精華大学、関西大学)の学生の平均値( $55.75\pm 8.82$ )と比べても高い傾向があった。但しこの調査は約10年前の調査であるため、今後同様な調査を看護系以外の学生で行う必要があることが示唆された。また教育レベルが高いほど態度が平等主義

的である<sup>15-17)</sup>ことから女性学などの学習が進むにつれて、ISRO得点の上昇が推測される。それは、看護専門学校生の平均年齢が高いにも関わらず、ISROの平均点が低いことからもうかがうことができる。今後、この調査を縦断的に行うことにより明確していく必要性が示唆された。

### 3) PAQの教育形態別の比較

(1) M尺度、F尺度、MF尺度については、教育形態による有意の差はみられなかった。また東<sup>9)</sup>の報告による早稲田大学の学生のM尺度( $16.1\pm 4.39$ )、F尺度( $20.4\pm 4.22$ )、MF尺度( $11.9\pm 4.00$ )と比較すると、M尺度に関しては、低い傾向が、F尺度に関しては、同様な傾向が、MF尺度に関しては、やや高い傾向が示された。

(2) さらに性役割パーソナリティ分類によると、教育形態による有意の差は認められなかった。しかし看護大学生は他の学生と比較すると、両性具有型、男性型がやや多くみられた。東の調査報告<sup>9)</sup>によると、看護職の職位の上昇に伴って両性具有型および男性型の増加を示す傾向があると述べている。看護大学学生が、そのような特性を持っていることを考えると、今後の成長が大いに期待される。今後、同様に看護専門学校生や短期大学学生との比較をさらにしていく必要が示された。また他の4年制看護大学生と比較する事も有意義となってくる。

### 4) 教育形態別のISROと性役割パーソナリティの関連

二元配置の分散分析の結果交互作用がみられなかったことから選択した教育形態と性役割パーソナリティには関連がないことがわかった。また選択した教育形態によって性役割志向性(ISRO)は、相違があること、性役割パーソナリティによってもISROが違ふこ

ともわかった。そのことから、看護専門学校生と比較して看護大学学生は、性役割パーソナリティとは関係なく、より平等観の高い学生が所属していることがわかった。次に全学生を対象にしたパーソナリティ分類別では、男性型が女性型よりISRO得点が高いことがわかった。このことから、男性型の特性をもった学生は、より平等観が強いことがいえる。

以上のことから、看護大学には看護専門学校と比較すると、より平等観の高い学生が所属していることがわかった。また看護大学学生は両性具有型および男性型の占める割合が他の学生と比較すると高い傾向が示された。この特性は、看護が自立を目指すとき大いに役立つものと推測される。つまり医師に従属することから脱皮するためには一定レベルの教育と平等観をもった看護婦を養成することにつながると考えるからである。

今後、他大学の看護大学生の傾向や一般女子学生との比較、さらには男子学生との比較をすることで、看護系女子学生の性役割を明確にしていきたいと考える。

## 文 献

- 1) 井上輝子著：性役割の史的成立と現在（井上輝子，上野千鶴子，江原裕美子編），日本のフェミニズム 性役割，28，東京岩波書店（1995）。
- 2) 湯沢擁彦著：性差別の現実とその文化的背景－社会通念・しきたりを中心に－（湯沢擁彦，阪井敏郎共編）現代の性差と性役割，10-12，培風館，東京（1979）。
- 3) 湯川隆子著：性役割（無藤隆，高橋恵子，田島信元編），発達心理学Ⅱ 青年・成人・老人，pp46-60，東京大学出版会，東京（1990）。
- 4) 東清和，鈴木淳子著：性役割態度研究の展望，心理学研究，62(4)：270-276（1991）。
- 5) 東清和著：看護職の職位と性役割パーソナリティとの関連性，産業・組織心理学研究，4(1)：3-16（1990）。
- 6) Bem, S. L.: The measurement of psychological androgyny, *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42: 155-162 (1974).
- 7) Bem, S. L.: Probing the promise of androgyny, In A. G. Kaplan & J. P. Bean (Eds.), *Beyond*

- sexrole stereotypes: Readings toward a Psychology of androgyny. Boston: Little, Brown: 48-62 (1976).
- 8) 東清和著；心理的両性具有Ⅲ－PAQ日本語版の検討－，早稲田大学教育学部 学術研究－教育心理学編－，41: 73-84（1993）。
  - 9) 東清和：青年期における性役割志向性性差，社会心理学研究，6(1)：23-32（1990）。
  - 10) Dreyer, N. A., Woods, N. F., & James, S. A: ISRO: A scale to measure sex-role orientation, *Sex Roles*, 7: 173-182 (1981).
  - 11) Spence, J. T., & Helmreich, R. L.: The attitudes toward women scale: An objective instrument to measure attitudes toward the rights and roles of women in contemporary society, *Journal Supplement Abstract Service Catalog of selected Documents in Psychology*, 2: 66 (1972).
  - 12) Rosenkrantz, P., Vogel, S., Bee, H., Broverman, I., & Broverman, D.: Sex-role stereotypes and self-concepts in college students, *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 32: 287-295 (1968).
  - 13) 石村貞夫著：SPSSによる統計処理による統計処理の手順，東京図書，東京（1995）。
  - 14) 岩原信九郎著：教育と心理のための推計学，243-259，日本文化科学社，東京（1965）。
  - 15) Mason, K. O., Arger, A., & Czajka, J. L. Changes in U.S. women's sex-role attitudes, 1964-1974. *American Sociological Review*, 41: 573-596 (1976).
  - 16) Mason, K. O., & Bumpass, L. L. U.S. women's sex-role ideology, 1970. *American Journal of Sociology*, 80: 1212-1219 (1975).
  - 17) Mason, K. O., & Lu, Y. Attitudes toward women's familial roles: Changes in the United States, 1977-1985. *Gender and Society*, 2: 39-57 (1988).

（受付：1998年12月18日；受理：1999年2月17日）